

## 2023年度 一般選抜Ⅰ期試験問題

国語総合(古文・漢文を除く)

長岡崇徳大学看護学部看護学科

第1問 次の文章を読んで各問に答えなさい。

われわれは虫の音を聞いて、楽しむであろうか。楽しむというよりも、もっと深く感ずるものがないだろうか。トリの声もよいにはちがいないが、トリよりもっと非人情な虫の音のなかにこそ、なにかもっと直接に、ものあわれを伝えるものが、ないであろうか。

都会にすんでいては、しかし、ものあわれもあったものではない。われわれは<sup>A</sup>縁日でひさぐ、マツムシ・スズムシ・クツワムシといったたぐいの、なかば家畜化した虫、われわれがその音を楽しむために、育てあげた虫を知るのみである。それは<sup>①</sup>ヨウシヨクのウナギや、放流のアユと大差のない、人間の製品である。たしかにスズムシなどでは、野生のものの音色は幼稚であり、かぼそくて、深く楽しめるものではないかもしれないが、私はそれでも野生のものではなくては、ほんとうに聞いてもものあわれを感ずることは、できないのでなかるうかとおもう。

<sup>B</sup>自然の中にあつて、自然のものとして聞く虫の音であつてこそ、ものあわれも感ぜられるのである。そういえば、町にすんでいても、まだいろいろな虫の音が、聞こえてくるはずである。庭の芝生ではまだ<sup>②</sup>ツユの明けきらぬうちから、あの小さいながらも情熱的な、マダラスズのリーツ、リーツという音が、聞こえる。積雲の一角が崩れて金色に輝く夕方には、豆腐屋の笛の音やニイニイゼミの声にまじつて、どこかの庭の木立から、ヤブキリのチリリリーという爽やかな音が、聞こえてくる。そのときわれわれは、今年もまた夏になったな、と思うのである。

朝寒むを覚える八月の末、九月のはじめともなれば、草むらにすたく虫の音も、おのずからその種類をます。チチチチチ、どこからあんな<sup>③</sup>可憐な音が聞こえてくるのだろうかと思ひ、書物からしばし眼をはなしてあたりをさがすと、一匹のカネタタキが、天井にとまっていたのである。ナミコオロギがかまどの下で忙しく、ツヅラサセ、ツヅラサセと鳴き、ウマオイが蚊帳(かや)にとまつて、スーイッチョ、スーイッチョと鳴くようになると、ゆで豆屋や焼栗屋の呼ぶ声とともに、もう夕涼みも氷店のあかあかとした電燈の光りも、なんとなく落ちつかなくなり、そのざわめきの中に夏の去りゆく<sup>④</sup>哀愁をおぼえる。

このころの郊外はよいかな。初秋の空はすみ、冷風は颯々として袂をはらう。虫の音——エンマコオロギのコロコロロリー、オカメコオロギやミツカドコオロギのジツ、ジツ、ジツ、ジツ、ササキリ類のジリジリジリー、クサヒバリやヒゲジロスズのフィリリリー、イブキスズのリーリ、リーリ、リーリ、カントンのフィリ、フィリ、フィリなど。夜になつて満月は皎々とさえ、葉末におく露の玉がきらきらと輝く<sup>⑤</sup>ノベに立てば、これらの音に和してなお、セスジツユムシのキチキチキチ、ギーチ、ギーチ、エゾツユムシのシーキチキチ、シーキチキチ、クサキリ・クビキリバッタのジーツと長くひく音、もちろん野生のマツムシ・スズムシ・クツワムシの音も、これに加わる。

異国に旅して、人間の風俗言語が変わると同じように、そこで鳴く虫の音までが異なつて聞こえるときには、たしかに旅情の高まりをおぼえ、われわれの好奇心は、いっそう<sup>⑥</sup>澆漑としてくるにちがいない。けれどもまた、<sup>C</sup>潤いのない異国の生活の中にあつて、たまたま、野生のス

ズムシの、あの故国で聞いたのと同じ可憐な音を聞いたときほど、しみじみと旅情をそそられるときも少ないであろう。

もしまた、蒙古高原へ行つて、满目蕭条とした荒野の中に、一匹の虫さえ鳴かぬ秋を経験したならば、ものあわれはいうもさらなり、虫の音を樂しむ余裕さえ、もたぬと思つていた都会人でも、Dきつとなにか物足りなさを感じるとともに、都会生活では忘れていたものを思いだし、虫の音の聞こえぬ秋なんて、まったく秋の資格がありはしない、とつぶやくことであろう。

(今西錦司『私の自然観』より)

問一 傍線部③、④、⑥の漢字に読み仮名をふり、①、②、⑤のカタカナを漢字に直して解答欄に書きなさい。

問二 傍線部A「縁日でひさぐ」とは、どのような意味だろうか。本文に即して説明しなさい。

問三 傍線部Bに「自然の中にあつて、自然のものとして聞く虫の音であつてこそ、ものあわれも感ぜられるのである」と書かれているが、筆者はなぜそのように思うのか、本文に即してその理由を説明しなさい。

問四 傍線部C「潤いのない異国の生活の中にあつて、たまたま、野生のスズムシの、あの故国で聞いたのと同じ可憐な音を聞いたときほど、しみじみと旅情をそそられるときも少ないであろう」における筆者の心中を、「しみじみと旅情をそそられるときも少ないであろう」という表現に注意し、答えなさい。

問五 傍線部D「きつとなにか物足りなさを感じる」と筆者が言うのはなぜだろうか。直前の表現に注意して説明しなさい。

## 第2問 次の文章を読んで各問に答えなさい。

馬車の中にはお婆さんが五人居眠りしながら、この冬は蜜柑みかんが豊年だという話をしていた。馬は海の鷗かもめを追うかのように尻尾しっぽを振り振り走った。

馭者ごしやの勘三は馬を大変愛している。その上、八人乗りの馬車を持つているのは、この街道で勘三一人だ。また彼はいつも自分の馬車を街道の馬車のうちで一番綺麗きれいにしておく程の神経質だ。坂道へさしかかると彼は馬のために馭者台からひらりと下りてやる。このひらりと下りてひらりと乗る身振りがいかにも軽快であることを、内心得意に思っている。また彼は馭者台に坐ついても馬車の揺れ工合で、子供が馬車のうしろにぶら下つたことを感づけるので、ひらりと身軽に飛び下りて子供の頭へこつんと拳骨げんこつを食らわせる。①だから街道の子供たちは勘三の馬車に一番目をつけているが、また一番恐れている。

ところが今日は、どうしても子供が捕まらないのだ。A いつもなら、彼はひらりと猫のように飛び下りて馬車をやり過し、知らずにぶら下っている子供の頭へこつんと拳骨を食らわせて、得意気に言うのだ。

「間抜けめ。」

彼はまた馭者台を飛び下りてみた。これで三度目だ。十二三の少女が頬を真赤に上気させてすたすた歩いている。肩で刻むように息をしながら眼がきらきら光っている。②しかし彼女は桃色の洋服を着ている。靴下が足首のあたりまでずり落ちてしまっている。そして靴を履いていない。勘三がじっと少女を睨みつける。彼女は横の海に目をそらして、たったたつと馬車を追って来る。

「チエツ！」

勘三は舌打ちして馭者台に帰った。ついぞ見慣れない( ) ③( )少女は海岸の別荘にでも来ているのだろうかと思って勘三は少し遠慮していたのだが、三度も飛び下りてもつかまらないから腹が立ったのだ。もう一里もこの少女は馬車にぶら下がって来ているのだった。Bそれがいまましいばかりに勘三は大変愛する馬を鞭打ってさえ走ったのだった。

馬車が小さい村に入った。勘三は高らかにラッパを吹いてますます走った。うしろを振り返ると、少女が胸を張り断髪を肩に振り乱しながら走っている。片一方の靴下を手をにぶら下げている。

C 間もなく少女が馬車に吸い附いたらしい。勘三が馭者台のうしろの硝子越しに振り返ると、つと少女の身を縮める気配が感じられた。しかし勘三が四度目に飛び下りた時には、もう少女は馬車から身を離れて歩いている。

「おい。どこへ行くんだ。」

少女はうつむいて黙っている。

「港までぶら下って来るつもりか。」

矢張り少女は黙っている。

「港か。」

少女はうなずいた。

「おい、足を見な、足を見な。血が出てるじゃないか。剛気な小女郎だな、え、お前さん。」  
さすが勘三は顔をしかめた。

「乗っけて行ってやるよ。中へ乗っかってくん。そこへぶら下ると馬が重いからよ、頼むから中へ乗ってくん。おらあ間抜けにはなりたくねえ。」

④ そう言って馬車の扉を開いてやった。

しばらくして勘三が馭者台から振り向いて見ると、少女は馬車の扉に挟まれた洋服の裾を取ろうともせず、さっきの勝気な顔色は消えてしまって、静かに恥かしかつてうなだれていた。

ところが、そこから一里の港へ行っての帰り道に、どこからともなくまた同じ少女が馬車を追っかけて来るのだった。D もう勘三は素直に馬車の扉を開いてやった。

「おじさん、中へ乗るのは厭なんだから。中へ乗りたくはないんだもの。」

「足の血を見な、血を。靴下が赤くなってるじゃねえか。凄、小女郎だなあ。」

二里の上りもゆるゆる馬車はもとの村へ近づいた。

「おじさん、ここで下して頂戴。」

勘三がふと道端を見ると、小さい靴が一足枯草の上に白く咲いていた。

「冬でも白い靴を履くのか。」

「だってあたし、( ) ⑤( )にここへ来たんだもの。」

⑥ 少女は靴を履くと、後も見えず白鷺のように小山の上の感化院へ飛んで帰った。

(川端康成「掌の小説」より)

問一 傍線部①に「だから街道の子供たちは勘三の馬車に一番目をつけているが、また一番恐れられている」とあるが、それはなぜか。考えられる理由を二つ（傍線部①の前半「だから街道の子供たちは勘三の馬車に一番目をつけている」に関連して一つ、傍線部①の後半「また一番恐れられている」に関連して一つ、合計二つ）書きなさい。

問二 傍線部②に「しかし彼女は桃色の洋服を着ている」とあるが、ここではなぜ「しかし」という逆接の接続詞が用いられているのか。洋服の色が何を表すのかと、彼女の行動を関連させて、考えられる理由を書きなさい。

問三 空欄部③には、少女を形容するある言葉が入る。前後の文脈をよく考えて、最も適切なものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 場違いに異様な
- 2 何とも言えず不気味な
- 3 明らかにみすぼらしい
- 4 高貴に美しい

問四 傍線部④「そう言って馬車の扉を開いてやった」ときの勘三の気持ちに最も近いと思われるものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 理不尽さをぐっとこらえて我慢する気持ち
- 2 いまいますが、半ばあきらめの気持ち
- 3 もうこれ以上はごめんだという拒絶の気持ち
- 4 どうてもい理解できないという不可解な気持ち

問五 直前の勘三の台詞（「冬でも白い靴を履くのか。」）を踏まえ、空欄部⑤に当てはまる季節を表す漢字一字を書きなさい。

問六 次の一文は、本文中のある箇所にあつたものである。挿入する上で最もふさわしいと思う箇所を、以下の1～4の中から一つ選びなさい。

つまり、猿のように馬車のうしろにぶら下っている現行犯を取り押さえることができないのだ。

- 1 Aの箇所
- 2 Bの箇所
- 3 Cの箇所
- 4 Dの箇所

問七 本文の表現上の特徴や主題について、最も適切なものを、次の1～4のうちから一つ選びなさい。

- 1 いつもは難なく子供を捕まえることができる勘三が、四度も馬車を飛び下りても捕まえることができなかつたという異様さを、血を流しながらも馬車を追いかける少女を描くことによって、勘三の心情が恐れへと不気味に変化するさまを表している。
- 2 描写の中心は少女であり、靴も履かずに馬車を追いかける剛気さと、馬車の中では扉に挟まれた洋服の裾を取ろうともせず、静かに恥かしがってうなだれている対比によって、街道沿いの子供たちとは明らかに違う異様な少女の様子を描こうとしている。
- 3 馬車にただ乗りをする少女に対して初めは腹を立てていた勘三が、いつしかあきらめから親近感を抱くようになる心理過程を描くことによって、その少女の野性的で奔放な魅力を効果的に浮き彫りにすることに成功している。
- 4 神経質なまでに自分の馬車を綺麗にし、馬を愛する勘三の性格が、不思議な少女とのやり取りを通じて余すところなく描かれており、特に勘三の心情がどのように変化していくのかについては、直接的な情景を描写することで表されている。

問八 傍線部⑥「少女は靴を履くと、後も見ず白鷺のように小山上の感化院へ飛んで帰った」とは、具体的に少女のどのような様子を描写しているのか。少女の内面に即して説明しなさい。

第3問 次のA、Bの四字熟語について、それぞれの読みと意味を解答欄に書きなさい。また、C、Dのことわざについて、それぞれの意味を解答欄に書きなさい。

A 一期一会

B 自画自賛

C 石の上にも三年

D 溺れる者は藁わらをもつかむ